

朝鮮通信使従事官

李南岡

(李邦彦)

書

本願寺八幡別院蔵

金臺寺裏客重來

竹塢荷塘乱雪堆

殊域屢看時物變

此行何事尚遲回

辛卯臘月上浣

東韓歸客題

(一七一一年 一二月月上旬)

金臺寺の裏に客重來せり

竹塢の蓮池に乱雪堆し

殊域で屢時物の變化を看る

此の使行は何事にして尚回遅いのか

金臺寺という所に再びやってきた

竹の茂っている堤のある蓮の池に雪がうずたかく積もっている

異国で時の移り変わりを何度も目にするのである

「の旅はどつして」のよつに帰りが遅くなるのであろうか

(望郷の歌)

徳川秀忠(二代)將軍以来、將軍就任の都度、朝鮮より祝賀使節が来朝の慣例で、十代將軍の時まで十回来朝したが、野洲(行畑)・鳥居本間は中山道を通らず、いわゆる、「朝鮮人街道」(徳川家康の関が原戦勝後の上洛道路で吉例の道ということ)で戦勝街道とも言う)を通行し毎回ごとに浄土真宗本願寺派(西本願寺)「本願寺八幡別院」を昼食所本陣と定めてあつた。ちなみに、上官クラスは、当院。中官クラスは、現在の京街道内にある池田郵便局隣の、浄土宗寺院「正栄寺」。下官クラスは、玉木町にある、でつちようかんの店「和た与」の隣の真宗大谷派(東本願寺)「蓮照寺」。お供の方には京街道内の町屋が休憩所として提供された。

正徳元年(一七一一年)家宣六代將軍の祝賀に、趙泰億が正使として来たが、従事官の李南岡(李邦彦)が、再来の感興を江戸からの帰路七言絶句に書き残したのがこの書である。

なぜ、望郷の歌を?

これには、朝鮮通信使の規模、性格が関わってくる。まず、一回の朝鮮通信使の規模(朝鮮よりの来朝者のみ)は、少なくとも四、五百人である。そして、上官クラスにおいては、殆ど文化人或は技術者であった。すなわち、それぞれの休憩所において、いろんな文化や技術を伝えながら、大行列が上洛していったのである。よって、全行程には一年近くの歳月がかかったと言われる。

どんな食事?

宝暦十四年正月(一七六四)に来朝した朝鮮通信使の一行四九九人を迎えた近江八幡の町は大変な活気を呈していたであろう、その人たちを接待するために『宝暦十四年正月朝鮮人來朝の節下行請取目録』と題した古記録が、江州八幡町旅館、田中惣左衛門の手によって残されている。

この記録には、当時の献立が記されているだけでなく、随員の数、宿割、接待役人の名前まで詳細に書かれていた。献立については、各回の使節ごとに多少の違いはあっただろうが、このたび、近江八幡市より発行された朝鮮通信使資料「八幡山の宴」によると、カラスミ、鮎ずし、あわびなどの高級食材がふんだんに使われた、すばらしく豪華なものである。

信楽焼の食器?

一六〇七年以降、前後十二回に及ぶ朝鮮通信使の来訪に対し、近江八幡にあっては、使節一行のもてなしについて、わざわざ信楽焼一式の食器が準備されていることが文書の中に明記されている。このことは、焼物の故郷である朝鮮の国から来た人々に対し、日本古窯の一つである湖国の焼物で食卓を飾ったことは、正に驚きであり、当時の関係者の心意気、気配り、そして緊張は如何ばかりかと想像される。

食器の復元については、滋賀県信楽町に現在残されている朝鮮通信使接待に使用された食器及び、近江八幡市内に残されている古記録を参考にしたもので、現在当院と、近江八幡市役所、小幡町資料館、ホテルニューオウミに保存されている。

ただ、これを見た人が一様に言われるのは「これが信楽焼?」である。「ご存知のように現在の信楽焼と言えば、土の触感をそのまま出したような焼物であるが、この食器については全く正反対である。現在の信楽焼の陶工の方にお尋ねすると、工法としては残っているそうだが、殆ど売り物としては、使用していないとのことである。また、一説によるとこの食器は、朝鮮において最高の色といわれる白色を使い、いわば中国の白磁に似せた物を作ったようである。

これらのことから、うかがえるように町民あげての使節一行歓迎のムードは、実にたのもしく、ほほえましい限りである。町民の心づくしが遠い昔の国際親善の一助を果たしたものと思われる。